

# 台湾の灯台の歴史と今日の意義

(一財) 日本航路標識協会専務理事  
(一財) 防衛技術協会客員研究員

栗井 次雄

## はじめに

日本の灯台は外国船来航のため開国とともに建設が始まり、多くの灯台が、150年を超える歴史を刻みつつ今も使われている。

一方、台湾にも多くの灯台があるが、それらの中には歴史や役割が日本の灯台と密接なかわりを持つものがある。1895年に始まる台湾統治において、総督府は社会資本整備に多大な投資を行ったが、日台間の輸送は海路が全てであり、航海の安全を確保するための体系的な灯台整備は重要な事業であった。明治期の灯台建設は、国際情勢の影響を受けつつ行われたのである。

東シナ海を走る日台航路の主な灯台を北から並べると、建設時期は次のようになっている。

- 伊江島灯台（沖縄） 明治30年（1897年）
- 津堅島灯台（沖縄） 明治29年（1896年）
- 先原埼灯台（沖縄） 明治29年（1896年）
- 基隆灯台（台湾） 明治34年（1900年）
- 白沙岬灯台（台湾） 明治35年（1901年）

日台航路に沿ったこれらの灯台は、統治開始後の短期間に順次建設されたことが分かる。中でも沖縄本島西側の伊江島灯台（写真1）は、当時東洋一の高さを持つ巨大な灯台で、短い工期で完成させるため、塔体は鉄造である。この時の建設部長は陸軍次官の児玉源太郎であった。台湾総督は明治29年10月から明治31年2月

まで乃木希典、その後明治39年4月までが児玉であったから、伊江島灯台を手掛けた児玉は総督になってからも台湾の灯台にかかわったわけである。この時期には日本の灯台建設技術は確



写真1 伊江島灯台



写真2 桃園市所在の白沙岬灯台

立しており、総督府が台湾に建設した灯台にはデザインと技術に明らかな共通性がみられる。

筆者が令和8年1月に台湾を訪問した際、桃園市と文化交流を行っている銚子市の方々のご案内で、台湾の灯台関係者と面会でき、台湾海峡北部に面した白沙岬灯台(写真2)が所在する桃園市の政府観光旅遊局の白惠君女史(台湾灯台協会理事)から、台湾海峡の灯台について、歴史と技術の両面からの興味深い論考「台湾海峡における歴史的灯台の設置背景と二重円筒構造に関する一考察」<sup>1)</sup>を頂戴した。灯台を通して日台関係を含む歴史を分かりやすく紹介し、地政学的視点による灯台の意義にも考察を加えている。灯台に対する愛着が感じられる好個の論考であるので、これの要点を引用しつつ台湾の灯台を紹介させていただく。なお台湾では灯台を「灯塔」と呼んでいる。

論考によると、台湾の主要な灯台には、以下のような着目点がある。

## 所在と歴史

台湾海峡の中国側に位置し、閩江(びんこう:福州市)および厦門港(厦門市)に近接する金門と馬祖は、現在、それぞれ台湾の金門県と連江県に属している。これらの島々には、清国の海關(海上貿易管理)制度のもと、英国主導で設置された最初期の灯台が5基現存しており、英国人技師設計によるレンガ造や石造、「二重円筒構造(レンガ造二重構造)」といった建築技術が用いられている。これらは日本統治による管理、修復、改築を経ておらず、近代初期の灯台建築技術を比較的良好な形で伝えている。

一方で、太平洋戦争や中国内戦、そして海峡をはさんだ戦後の対立という軍事的緊張の中で傷ついた灯台もあり、航路標識としての需要が減ったことに伴い、灯室が失われたまま、ある



図1 台湾の主要灯台の配置(台湾交通部航港局 沿岸主要燈塔燈桿索引圖)